



The Pragmatics Society of Japan
日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.31 / Spring 2014

会 長 林 宅 男

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 関西大学外国語学部 山本英一研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行【預金種目】当座【店番号】099【口座番号】0130378【口座名】日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

日本語用論学会 Newsletter 第31号をお届けします。第17回大会のお知らせがあります。発表申込みの締切りが7月31日ですので、ご注意ください。

=====

★会長メッセージ

「変わらず変化し続けること」

林宅男(桃山学院大学 教授)

雨の後の野山の緑が一層色濃く感じられる今日この頃、会員の皆様にはますますご健勝にお過ごしのことと存じます。日頃は本学会のために温かいご支援とご協力をいただき心よりお礼申し上げます。

さて、日本語用論学会は日本における語用論研究を組織化しその発展と会員の交流を促進するために、これまで様々な改革をして参りました。今回もこの場をお借りして前年度新たに実施した取り組みについてご報告させていただきます。

先ず一つ目は以前にも触れました年次大会の全国的展開についてです。前回の第16回大会は慶応大学で行われ、10年ぶりの2回目となる関東での開催でした。本学会は全国学会ではありませんが、関西の大学の関係者が中心になって発足し、運営されてきたという経緯から、今までは大会会場も殆ど関西圏、特に京阪神地区、に限られてきました。しかし、2年前に今後は更に多くの方に発表や参加をしていただけるように開催地を広げようという方針を立て、昨年度は

東京での開催が実現しました。お陰様で、前回の応募数は研究発表、ワークショップ、ポスター発表を合わせて計73件と前々回(74件)とほぼ同数で、過去数年間で最も多い件数でした。また、二日間の会期中の延べ参加者については、第10回記念大会以来の盛況で、257名と前年を50名以上回りました。期間中はMira Ariel教授(Tel Aviv University)を招いての基調講演や研究発表の他、初めての取り組みとして行いました「会話分析」のチュートリアルにも多くの方が参加されました。

二つ目は、上の学会の全国的展開に関連する課題として挙げてきました運営委員会の構成メンバーの広域化の推進です。昨年度に諸事情で運営委員を退かれた方の補充を兼ねて、今年度は新たに関東圏の大学に所属される3人の方に加わっていただくことになりました。その結果、現在では34名の運営委員の内ほぼ半数が関西圏以外の大学に勤務される委員から構成されています。また今年度からは組織的研究活動においても全国的展開を推進する試みを始めました。本学会では学会員の研究活動を支援する目的で、「研究会グループ」(SIG)の申込みを受け付けていますが、更に各地域での会員の研究活動を推進するために、今年度から新たに「地区研究会」を立ち上げることになりました。さし当たっては、全国を北海道地区、東北地区、中部地区、関西地区、四国地区、九州地区の5つに分け、各地区に在住の運営委員にその代表者となっていていただきました(各地区の研究会活動は今後メーリングリストなどでもお知らせいたします)

が、連絡先等については事務局にお問い合わせください。

本学会が更なる発展の課題として取り組んでいるものに、国際化の推進があります。ご承知のように本学会では第10回記念大会頃から英語での発表を受け、募集の段階から海外のメーリングリストを使って外国からの応募を促しています。また、基調講演には毎年海外の著名な語用論研究者を講師として招聘している、日本の言語系の分野では数少ない学会であります。残念ながら海外からの応募は近年まだ全体の2割程度にとどまっていますが、昨年度からクレジットカードによる会費支払も可能となったこともあり、より多くの参加が期待できるのではないかと考えております。今年度からは、その国際化の推進の一環として海外から著名な研究者に「海外特別顧問」に加わっていただくことにしました。その方たちは Malcolm Coulthard、Laurence Horn、Jacob Mey、Jef Verschueren、Deirdre Wilson の5人の語用論研究者で、過去に大会の基調講演に招待した先生方です。

最後に、この第31号から、ニュースレターのヘッダーのデザインが学会創立以来刷新され、その左上にはロゴマークが入っております。このロゴマークは、昨年度会員の皆様に応募を呼びかけ、大会参加者に投票によって選んでいただいたものです（実際には、応募作品には「ログタイプ」(logotype)と呼ばれる日英語によるデザイン化された学会名の文字列も含まれていました)。よく見るとお分かりかとおもいますが、このロゴマークは日本語用論学会の英語の頭文字(PSJ)の組み合わせからできています(その色はこのニュースレターでは黒ですが、この応募者からは、他に全体を緑にしたものとPSJの文字をそれぞれ青赤緑で配色した2種類も出されました)。ところで、ロゴマーク(和製英語)とは、団体・組織等についての象徴的イメージ(意味)を図案化したもので、広くは標識、絵画、彫刻といったものと同じように一種の記号(sign)であります。ご承知のように、記号の研究は、それが「シニフィアン(signifiant)」(記号表現)と「シニフィエ(signifié)」(記号内容)から構成されるとする「2項モデル(dyadic model)」を提唱したソシュール(Ferdinand de Saussure)の「記号学(sémiologie)」と、「対象(object)」、「記号表現(representamen)」、「解釈項(interpretant)」から成る「3項モデル(triadic model)」を提唱したパース(Charles Peirce)の「記号論(Semiotics)」に端を発します。その違いはソシュールが記号をメッセージの解読するための静的な社会のシステム(体系)として捉えたのに対してパースは記号

の意味はそれを使う人によって動的に変化する解釈的なもの(=作用(effect))として捉えたと言われています(後にモリス(Charles Morris)はパースのモデルをもとに、「語用論」という分野を「記号(sign vehicle)」と「解釈者(interpreter)」の関係を扱う分野として初めて定義づけしました)。さて、このロゴマークは学会名を表すだけではありません。発案者によりますと、これは苗木を模してデザインしたもので、それには本学会が言語学の大きな幹の一つとして成長し続けるという深い意味合いが込められているそうです。今後、このロゴマークを目にする多くの人がそれを本学会のロゴマークとして認識し、社会一般に記号として認知され定着するだけでなく、願わくば、それが、この発案者と同じような解釈的意味作用をもたらすよう、今後も努力を続けてまいりたいと存じます。

.....

★追悼：「児玉先生を偲んで」

会長 林 宅男

一般メーリングリストでもお知らせいたしましたように、立命館大学文学部名誉教授・児玉徳美先生が、去る3月11日にご逝去されました。謹んで児玉先生のご冥福をお祈り致します。

児玉先生は、学会創設時には本学会の初代編集委員長に就任され、創設翌年には第2回大会の会場校のお世話をいただくなど産声をあげたばかりの学会の発展に多大な御尽力をいただきました。その後は初代副会長も務められましたが2005年度を以て会長の小泉保先生が退かれる際には、学会として「若返り」をはかりより開かれたものにする必要があるというお考えから、会長選挙に関する細則をご提案になり、自らは選挙管理委員となって被選挙人から外られました。運営委員を退かれた後も顧問に就任していただき、本学会の運営のために多大な貢献をしてくられました。

また、先生からはこれからの語用論研究のあり方について会員に向けて数々の貴重なご提言をいただきました。第3回談話会(2006年7月1日)では「言語学は分析対象をいかに拡大できるか：閉塞状況からの脱出に向けて」と題する講演をしてくださり、『語用論研究』第13号(2011年)には「言語分析への提言」と題する論考を寄稿してくださるなど、顧問となられてからも大会や講演会にはいつもご出席下さり今後の研究の方向性をお示しく下さいました。その中で先

生が主張されてこられたのは、今日の言語分析は語彙や文法情報を中心とする文内の構造分析に留まっており、その「閉塞状況」を脱出することの重要性であります。先生は、従来の様々な言語理論や領域を再編しその蓄積を深化させることが今後の課題であり、それには、語の意味や用法を文脈の中で研究する「マイクロ語用論」だけでなく、分析対象と文脈情報の領域を拡大して言語が人にどのような影響を与えるかを社会・文化的関係から捉える「マクロ語用論」の研究を推進する必要があると力説されてきました。そして先生は上で紹介したもの以外に、10年以上の長きに渡り多くの著書でこのことを精力的に説いてこられました（『言語理論と言語論-言葉に埋め込まれているもの』（1998年）、『意味論の対象と方法』（2002年）、『意味分析の新展開-ことばの広がりに応える（後のハイフン削除）』（2004年）、『ヒト・ことば・社会』（2006年）、『ことばと論理-このままでいいのか言語分析』（2008年）、『いまあえてことば・言語分析・言語理論のありかたを問う』（2010年）、『ことばと意味』（2013年））。先生が昨年秋に最後に出版されたご著書『ことばと意味』（2013年）には、（この提言によって）「言語分析を通して今後人間の姿がみえてくるようになるのが私の夢である」（p.289）と書かれています。

児玉先生には本学会のことで折に触れいろいろとご心配いただき、その方向性について多くの助言をいただいてまいりました。今後も児玉先生のご提言をしっかりと受け止め、そこに秘められた熱い思いを胸に、先生の夢の実現に向けてしっかりと活動を続けてまいりたいと思います。

.....

★談話会報告

① 第5回講演会報告

科学研究費助成による国際モダリティ・ワークショップの招聘講師として来日された Dr. Daniel Vanderveken 教授 (University of Quebec, at Trois-Rivières) に無償講演をお願いした。当日の講演には、15名の方が参加された。Vanderveken 教授の講演は、彼がこの20年間に確立させた談話・会話の形式語用論の話で、論理学の訓練を受けていない聴衆を念頭におき、論理学の用語や規則・公理の説明を抜きにした一般的概説であった。しかし、Searle and Vanderveken の現代言語行為論、Grice の会話の論理、Vanderveken の一般化された Grice の会話の論理、関連性理論、ゲーム理論、最適性理論などの理論の大枠の理解を前提とした話であったのでいささか難解で

あったかもしれない。90分の講演の後、フロアからは、お二人の方から質問を頂戴した。講演内容の主要な部分は、Vanderveken (1994) *Principle of Speech Act Theory* (久保進 訳・註『発話行為の原理』松柏社) に始まる談話の理論をその後の一連の論文で修正発展させ、John Searle がこれぞ会話の理論と賞賛したものである。現在の彼の理論は、Searle and Vanderveken (1985) に始まる発話内論理 (モンタギュー意味論に代表されるモデル意味論の発展系) の上に、H. Kamp の談話表示理論 (DRT) や Morgenstern のゲーム理論などを取り込んだ重層的なものである。当日の話の中で、目新しかったのは Attempt の理論であった。Vanderveken 教授の会話の理論とその周辺をより明確に理解するのに最適の書に、氏の編纂の書 *Logic, Thought and Action* (Springer, 2005) がある。そこには、「理性、行動、コミュニケーション」、「科学における経験、真理、実在」、「命題、思考、意味」、「行為性、対話、ゲーム理論」、「論理と人工知能における推理と認知」といった区分のもとに Dascal, Searle, Tuomela, van Fraassen, Belnap, Lorenz, Zadeh を含む超一級の研究者の23の論文が収録されているので、ご関心の向きはぜひ一読されたい。

(久保 進)

②5月6日 (土) 13:00-17:00 東京学芸大学において、ロンドン大学のコートニー・ノーベリー先生および、東京大学の熊谷晋一郎先生の講演会が「自閉症と言語コミュニケーション-エビデンスに基づいた新たな言語と社会のデザインへ」をテーマにして行われました。司会は学芸大の松井智子先生、コメンテーターに同じく学芸大の藤野博先生をお迎えして行われました。

第1講演者の熊谷晋一郎講師は障害学の立場から、impairment と disability を区別する重要性を説かれました。さらに、自閉症およびその周辺を含む ASD (自閉症スペクトラム障害) が、個人と社会のミスマッチである disability であることを主張されました。また、その原因となる impairment を特定が必要であること、その方法論として、当事者研究が重要であることを例証されました。

一方、ノーベリー先生は、自閉症の子供がメタファーを理解できないとする通説を反証されました。一般に、自閉症の子供はメタファー理解が苦手なことが先行研究で指摘されていますが、ノーベリー先生は実験データから、心の理論のテストスコアにかかわらず、メタファーの理解は言語能力に相関することを指摘し、重回帰分析の結果、重要な要因は言語能力であるこ

と示されました。また、これを説明する可能性として、ASD をもつ子供に統合能力が欠けている場合があることを実験で示し、その方向性を示唆されました。

会場には 120 人を越える聴衆が集まり、ASD の当事者も含めた真剣な質疑応答が行われ、講演会は大盛況でした。

(鍋島弘治朗)

事務局から

★ 第 17 回大会のお知らせ

2014 年度の第 17 回大会は、以下のとおり、京都での開催となります。会員の皆様からの発表ご応募・ご参加をお待ちしております。なお、未確定部分につきましては、確定次第、順次 HP で更新していきますので、ご確認ください。

◆ 日時・場所

2014 年 11 月 29 日 (土)、30 日 (日)

京都ノートルダム女子大学

(<http://www.notredame.ac.jp/>)

京都市左京区下鴨南野々神町 1 番地

075-781-1173 (代表)

*今回は 11 月の開催ですのでご注意ください。

(1) 基調講演 (11 月 29 日予定)

題目：「語用論的障害を説明する：語用論理論と臨床データのマッチングをめざして」(仮題)

招聘講演者：ミック・パーキンス名誉教授 (シェフィールド大学)

Plenary Lecture: Explaining pragmatic impairment: finding the best fit between pragmatic theory and clinical data

Professor Emeritus Mick Perkins (University of Sheffield)

(2) 公開シンポジウム (11 月 30 日予定)

テーマ：語用論は臨床あるいは医療における相互行為の研究にどのような貢献ができるか

司会：久保 進 (松山大学)

講師：植田栄子 (青森公立大学)

大井 学 (金沢大学)

加藤 澄 (青森中央学院大学)

コメンテーター：

林 礼子 (甲南女子大学)

松井智子 (東京学芸大学)

Mick Perkins (シェフィールド大学)

Symposium: What can pragmatics do for the studies of medical as well as clinical interactions?

Chair: Susumu KUBO (Matsuyama Univ.)

Speakers: Teruko UEDA (Aomori Public Univ.)

Manabu OOI (Kanazawa Univ.)

Sumi KATO (Aomori Chuo Gakuin Univ.)

Commentators:

Reiko HAYASHI (Konan Women's Univ.)

Tomoko MATSUI (Tokyo Gakugei Univ.)

Mick PERKINS (Univ. of Sheffield)

◆発表募集

発表言語は日本語と英語の両方で、発表形態は、今まで通り、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの 3 種類です。なお、ワークショップにつきましては、一つのテーマについて様々なアプローチとから深く検討し研究者の交流が図れる良い機会でもあり、今後も一層促進していきたいと思っておりますので、皆様是非奮って応募いただきますようお願いいたします。以下に応募要領を示します。

◆応募要領

発表の種類にかかわらず、すべて用紙サイズを A4 とし、日本語の場合は 2,500 字以内、英語の場合は 500 words 以内で作成してください。参考文献は文字数の制限に含めません。

様式は自由としますが、所属と氏名は記入しないでください。ファイル形式は、Microsoft Word 形式 (doc, docx) か、PDF 形式 (pdf) しか受け付けておりませんので、あらかじめご了承ください。ワークショップの申し込みについては、代表者が全員の原稿を一つのファイルに取りまとめてください。詳しくは、本学会ホームページの「年次大会：研究発表募集要項」<http://www.pragmatics.gr.jp/cfp.html> を必ずご覧の上応募してください。

◆発表形態

口頭発表：発表 25 分＋質疑応答 10 分

ポスター発表：1 時間 40 分 (掲示時間)

ワークショップ：1 時間 40 分、特定のトピックについて 3 名以上の団体 (司会者を含む) で応募 (ワークショップは団体発表のみに変更になりました)。

◆発表言語

日本語もしくは英語。

◆応募締切

2014年7月31日(木)必着。

◆申し込み資格

発表の申し込みは会員に限ります。第一発表者が会員でない場合、必ず申し込みと同時に入会の手続きが必要になりますのでご注意ください。

◆申し込み制限

単独発表・共同発表にかかわらず、一人の会員が第一発表者として申し込みできるのは、一次会につき1件のみです。また、第一発表者としての申し込みがある場合、共同発表は自身が第一発表者であるものを除いて、1件のみです。第一発表者としての申し込みがない場合、共同研究の第二発表者としては2件までに限られます。

◆選考について

選考および研究発表の割り振りは運営委員会が行い、結果は9月中旬以降のなるべく早い時期に投稿者に通知します。

◆問い合わせ先

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp

(大会運営副委員長・岡本雅史宛)

投稿に関するお問い合わせは、できるだけ時間に余裕をもってお願いします(7月20日頃まで)。締め切り直前のお問い合わせには適切に対応出来ない場合がございますのでご了承ください。

◆応募方法

2011年の年次大会より、EasyChairを利用したオンライン申し込みとなっております。下記アドレスからアクセスしてください。必ずアクセスの仕方を上記サイト「年次大会：研究発表募集要項」からご確認の上、ご応募ください。
EasyChair for PSJ2014:
<http://www.easychair.org/conferences/?conf=psj2013>

=====

★ The 17th Annual Conference of the Pragmatics Society of Japan

http://www.pragmatics.gr.jp/conference_e.html

Date: November 29th and 30th, 2014

Venue: Kyoto Notre Dame University

(<http://www.notredame.ac.jp/>)

We are pleased to announce that the Pragmatics Society of Japan will be holding its 17th Annual Conference and is calling for paper presentations. With Dr. Mick Perkins as keynote-lecture speaker, our 17th conference aims at bringing together students and researchers working in this growing field of pragmatics and its related areas.

◆Call for Presentations

1. About presentations

Presentation Type: Lecture presentation:

Lecture 25 min. + QA 10 min.

Poster presentation: 1 h 40 m.

Workshop: 1 h 40 m. (Organization only).

2. Language: Japanese or English

◆Guidelines for abstract submission:

1. Deadline for submitting abstracts

July 31th, 2014

2. Online submission page: EasyChair for PSJ2014:

<http://www.easychair.org/conferences/?conf=psj2014>

3. Submission of Abstracts: Abstracts are invited for paper presentations on any aspect of pragmatic analysis from a variety of fields, including historical pragmatics, cognitive pragmatics, the interface between pragmatics and other disciplines, interlanguage pragmatics, social pragmatics, comparative or contrastive pragmatics studies.

Abstracts must be in English and must be submitted electronically on our online submission page, as attachment files in MS Word format (*.doc, or *.docx) and, if possible, in PDF format (*.pdf).

Abstracts should be approximately 500 words in length, not including references, figures, tables, and graphs. Abstracts are accepted in the following categories:

- Lecture presentation
- Poster presentation
- Workshop

Also note that the conference office only accepts submissions from members of the Society. The first author should be a member in the case of a group presentation. For membership, please contact the business office, whose email address is shown below.

4. Notification of the selection:

After September 20th

5. Contact person:

E-mail: presentation -at- pragmatics.gr.jp
(Masashi Okamoto)

◆Online submission page

The page "EasyChair for PSJ2014" can be accessed at:

<http://www.easychair.org/conferences/?conf=psj2014>

・ How to create EasyChair account

To use EasyChair, you must first create an account.

1. Access "EasyChair for PSJ2014", then click "sign up for an account".

2. Step 1: Captcha.

3. Step 2: Fill out the following fields: First name, Last name, Email. Then, click "Continue".

4. "Account Application Received" will appear.

5. You will receive an email containing a URL.

6. When you receive the email, click the URL. Please input an account name and password, then click "Create my account".

7. Your account will be created.

・ How to submit at EasyChair

1. Access EasyChair for PSJ2014 and sign in to access your account.

2. Click "New Submission".

3. Fill out the following fields.

Author

Title

Abstract

Type of presentation

(Lecture presentation, Poster presentation, or Workshop)

Presentation language (Japanese or English)

Topic area (Choose one or two of the following):

- deixis and reference

- pragmatic inference

- speech acts

- politeness and socio-linguistic approaches

- cognitive linguistic approaches

- relevance theory

- pragmatics and grammar

- pragmatics and language education

- discourse analytic approaches

- conversation analysis,

ethnomethodology

- historical pragmatics

- other

4. Upload Paper: Papers can only be submitted as Word or pdf files.

5. Click "Submit"

《事務局より》

★ 学会ロゴマーク決定

本 Newsletter のレターヘッドでお気づきかと思いますが、創立15周年を記念して公募しましたロゴマークが決定しました。会員の皆様とともに、ロゴマークと同様に、愛着のもてる気さくな学会・研究会が運営できるよう頑張りたいと思います。どうぞ、よろしく願います。

★ 地区研究会の立ち上げについて

冒頭の会長挨拶にもございますように、北海道、東北、中部、関西、四国、九州それぞれの地区で研究会を発足させることになりました。大会とは別に、特色ある運営で学会活動の活性化を目指したいと思います。ふるってご参加ください。

★ 平成25年度(2013年度)大会会計報告

収入	
年会費	143,000
大会参加費	595,000
懇親会費	203,000
収入計①	941,000
支出	
印刷費	342,000
郵送費	5,950
消費税・手数料	17,100
人件費	234,000
文具費	44,188
講師経費(謝金・旅費等)	317,221
懇親会	280,000
支出計 ②	1,240,459
①-②	▼299,459

★ 平成 25 年度決算報告 (案)

収入 前年度繰越残高 6, 033, 429

年会費 (大会分含む) 1, 708, 000

一般 292 口 (@5, 000) 1, 460, 000

学生 56 口 (@4, 000) 224, 000

賛助 4 口 (@6, 000) 24, 000

大会参加費 (2 日分、257 口) 595, 000

現会員・新入会員 176 口 (@2, 000) 352, 000

非会員 81 口 (@3, 000) 243, 000

懇親会費 (55 口) 203, 000

一般 38 口 (@4, 000) 152, 000

学生 17 口 (@3, 000) 51, 000

大会論文集 12, 000

その他 (『語用論研究』印税等) 37, 531

合計 8, 588, 960

支出

印刷費 (大会プログラム・プロシーディングズ・
学会誌等) 811, 225

郵送費 166, 806

学会ホームページ サーバサービス関連費 49, 465

事務局諸費 538, 088

人件費 (学生アルバイト) 234, 000

会議費 253, 005

文具費 48, 353

その他 (手数料など) 2, 730

会員管理業務委託費 352, 492

講師渡航費・謝金等 (6 名) 319, 720

懇親会 280, 000

合計 2, 517, 796

次年度繰越金 6, 071, 164

★ 会費納入のお願い

◆今年度の会費を、11 月末までにお払いください。

◆昨年度までの会費が未納の方には、連絡用紙を同封しております。学会の会計をご理解の上、未納の分も併せてお払いください。行き

違いがございました場合は、ご容赦ください。

◆**会費の未納が 2 年以上になりますと、会員の資格を失うことになっています。**

◆振替用紙が同封されていない方は、すでに今年度の会費が納入済みの方です。ご協力ありがとうございます。

◆年会費は、一般会員：5,000 円、学生会員：4,000 円、団体会員：6,000 円です。(正しい額でのご入金にご協力お願いいたします。)

◆委託業者を通じて、クレジットカードでのお支払いも可能です。

◆クレジットカード以外の振込先は以下の通りです。近年、所属機関のお名前のみでご入金される方が増えてきました。会員名の確認に手間取りますので、必ず会員ご自身のお名前をお書き添えください。

1. 同封の振替用紙で支払う場合：

郵便振替口座：00900-3-130378(ゆうちょ銀行)

口座名：日本語用論学会

このほか、次の 2・3 の振込先もご利用いただけます。

2. 他銀行の ATM から振り込む場合：

ゆうちょ銀行 支店名：099 当座 口座番号：

0130378 口座名：日本語用論学会 (ただし、

振り込み手数料がかかります。ゆうちょ銀行の ATM から振り込みが可能です)

3. ATM からの銀行振り込み：三井住友銀行 学

園前支店 普通預金 店番号 546 口座番号

3755278 日本語用論学会 長友俊一郎 (ただし、

他銀行からは振り込み手数料がかかります)

(お願い) 2 の場合は、事務局会計には、カタカナのお名前しか通知されません。また 3 の場合は、通常は通知がありません。お手数ですが、振り込みと同時に、事務局会計 (長友俊一郎 (関西外国語大学) : psj.treasurer_at_gmail.com) にお払いの年度とお名前、会員番号、所属、住所 (また、所属、住所に変更がある場合も同様) をメールでお知らせいただければ幸いです。

なお、国外からの振り込みには、

http://www.jp-bank.japanpost.jp/kojin/tukau/k_aigai/sokin/kj_tk_kg_sk_gaikoku.html(日本語版)

http://www.jp-bank.japanpost.jp/en/djp/en_djp_index.html (英語版) をご使用ください。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

★ 《新刊・近刊案内》

(運営委員会委員をはじめとする会員諸氏からの情報をもとに作成しました。紹介文は出版社によるものを利用しています。)

◆『言語行為と調整理論』久保進著 ひつじ書房 (8,200 円+税)

本書では、調整理論によって補強された新たな言語行為論を構築するとともに、会話の理論へのサールの懐疑的理由に対する反駁を通して、サールが会話の理論に対して求める「単独の発語内行為の理論と同程度の厳密さ」を備えた会話の理論を提案している。この会話の理論は、従来の言語行為論と異なり、情報伝達の会話のみならず調整的会話の構造や志向性との関係、そして、会話の流れをも説明することができる一般理論である。

◆『ビジネス場面におけるポライトネスの考察—アメリカ・イギリス・日本映画に表れる依頼・対立・謝罪表現の分析—』北山環著 大阪教育図書 (2,800 円+税)

日常生活のある状況において、人がどのように考えどのような表現を使うかは生まれ育った文化の発想に大きく影響されている。考え方や言語活動は長年にわたり自分の住む環境の中で築き上げられ、自然に一つの基準を生み出していく。本著は、英米文化と日本文化の異なる言動の基準が言語活動にどう表れているかを映画のビジネス場面を素材として検証することで互いの発想を比較し、表現の使用傾向に新たな光を当てていく。

◆『解放的語用論への挑戦 - 文化・インターアクション・言語』井出祥子・藤井洋子編 くろしお出版 (1,800 円+税)

『解放的語用論の挑戦』というタイトル、「文化・インターアクション・言語」という副題の説明は 1 章に詳説されています。2 章から 6 章までの論文は、研究分担者がそれぞれ自由な発想で研究し、国内外の学会で発表した研究を論文にしたものです。どの論文も本プロジェクトが作成した多言語比較可能な映像談話データ「ミスター・オー・コーパス」を使っています。各章の冒頭には、この章ではどういうことが書いてあるのかを読者にやさしく語りかけ、末尾には「これからの研究のために」という囲み記事として、今後こんなことが考えられる、という読者へのメッセージがあります。大学生、大学院生、研究者だけでなく一般に広く読んで頂ける平易で興味ぶかい内容の書籍をめざしました。

◆『語用論キータム事典』Nicholas Allott 著 今井邦彦監訳 開拓社 (3,800 円+税)

本書が扱う項目は 200 以上におよび、語用論

のみならず意味論や認知言語学などの関連諸分野まで網羅する。また、チョムスキーやグライスなどの主要研究者を取り上げ、オースティンが英国諜報部に所属していたといった逸話（エピソード）にまでふれている。語用論を中心とした重要概念を精選し、分かりやすくコンパクトにまとめた本邦初の本格的キータム事典であり、学生から専門家に至るまでの幅広い読者を対象とした手引書である。

◆ Constructionalization and Constructional Changes. Elizabeth Closs Traugott, Graeme Trousdale 著 Oxford University Press.

Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale develop an approach to language change based on construction grammar. Construction grammar is a theory of signs construed at the level of the phrase, clause, and complex sentence. Until now it has been mainly synchronic. The authors use it to reconceptualize grammaticalization (the process by which verbs like to have lose semantic content and gain grammatical functions, or word order moves from discourse-prominent to syntax-prominent), and lexicalization (in which idioms become fixed and complex words simplified). Basing their argument on the notions that language is made up of language-specific form-meaning pairings and that there is a gradient between lexical and grammatical constructions, Professor Traugott and Dr Trousdale suggest that language change proceeds by micro-steps that involve closely related changes in syntax, morphology, phonology, semantics, pragmatics, and discourse functions. They illustrate their exposition with numerous English examples drawn from Anglo-Saxon times to the present, many of which they discuss in depth.

◆ The Structure of Discourse-Pragmatic Variation. Heike Pichler 著 John Benjamins.

Everyday language use overflows with discourse-pragmatic features. Their frequency, form and function can vary greatly across social groups and change dramatically over time. And yet these features have not figured prominently in studies of language variation and change. The Structure of Discourse-Pragmatic Variation demonstrates the theoretical insights that can be gained into both the structure of synchronic language variation and the interactional mechanisms creating it by subjecting discourse-pragmatic

features to systematic variationist analysis. Introducing an innovative methodology that combines principles of variationist linguistics, grammaticalisation studies and conversation analysis, it explores patterns of variation in the formal encoding of I DON'T KNOW, I DON'T THINK and negative polarity tags in a north-east England interview corpus. Speakers strategically exploit the formal variability of these constructions to signal subtle meaning differences and to index social identities closely linked to the variables' and their variants' functional compartmentalisation in the variety. The methodology, results and implications of this study will be of great interest to scholars working throughout variationist sociolinguistics, grammaticalisation and discourse analysis.

■ A Cognitive Pragmatic Analysis of Nominal Tautologies 山本尚子著 ひつじ書房 (8,800 円 + 税)

英語の名詞句トートロジーに関する先行研究は豊富にあるが、日本語の多様な名詞句トートロジー表現形式を包括的に説明できるものはこれまでになかった。本書は、日本語の名詞句トートロジー発話の解釈メカニズムについて、認知語用論の視点から分析を行い、名詞句トートロジーが手続き的情報をコード化している表現形式であることを提案する。

■ A Contrastive Study of Responsibility for Understanding Utterances between Japanese and Korean 尹秀美著 ひつじ書房 (8,400 円 + 税)

日本語と韓国語は語彙、語順、敬語など文法面での類似点が多いため、会話レベルでも両言語は同じような振る舞いをすると思いがちである。事実、ハインズは、発話理解の責任主体という観点から英語は話し手責任、日本語と韓国語は聞き手責任の言語だと主張している。しかし、本書では、対応する場面で用いられる日本語と韓国語の具体的な発話データに基づいて、韓国語は、日本語と異なり、話し手責任の言語であることを例証する。

<<広報委員会からのお知らせ>>

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報をお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。

(連絡先: 北野浩章 kitanohiro-at-gmail.com)

～編集後記～

Newsletter 31 号をお届け致します。2014 年春号というのが、もう初夏になってしまっていて、申し訳ございません。春の爽やかさからワールドカップの熱さへと時は流れるばかりですね。今月号で画期的な事 - それは、今月号から本学会のロゴマークがデビューいたしました！ (トップページの左上で～す！) 会員の皆様もご存知のように応募があった 8 点の中から昨年 12 月の年次大会で参加者による投票で最多投票数を獲得し選出されたものです。作者は京都大学大学院の安在珉 (アン ジェミン) 氏です。これから、いろんな場面でこのロゴマークがお目見えする事を期待しましょう！

最後になりましたが、編集に当たり、会長・事務局長初めお忙しい中をご協力して下さった運営委員の皆様方に感謝の意を述べさせていただきます。最初は、談話会とかの写真も掲載しようとか、いろんな事をかんがえておりましたが、なかなか実現出来ないまま終わってしまっていて悔いは残りますが、また次号以降への課題したいと思います。会員の皆様からのご意見ご要望などがございましたら、お寄せ頂ければ幸いです。(鈴木光代記)

~~~~~

[広報委員]

- \* 委員長: 田中廣明
- \* Newsletter 編集担当: 鈴木光代、北野浩章、堀田秀吾